

# これもあれも 外来種だらけの水辺

侵略的外来水生植物の大陸

ナガエツルノゲイトウ・オオバナ

林紀男さん

片岡友美さん

■日時：2024年11月16日（土） 13:30～16:00

■会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ 1階 ホール

■開催趣旨：手賀沼や印旛沼に繁茂している侵略的外来水生植物ナガエツルノゲイトウやオオバナミズキンバイが、千葉県内広域に侵入・拡散しつつある。沼・河川、農地・水利施設への侵入・拡散域の変遷・経緯など最新の情報を提供する。併せて、アカミミガメとアメリカザリガニが条件付特定外来生物に指定されたことにより何が変わったのか、どう対処すればよいか、注意喚起する。

## ■プログラム

13:30 挨拶 手賀沼流域フォーラム実行委員会 委員長 八鍬雅子

千葉県環境生活部 水質保全課 湖沼浄化対策班班長 泉水良介さん

13:40 講演「身近に迫る侵略的外来水生植物～今や、手賀沼・印旛沼から千葉県全域へ！」

講師：林紀男さん（千葉県立中央博物館 上席研究員）

質疑応答

15:20 解説「アカミミガメとアメリカザリガニとのつきあい方」

講師：片岡友美さん（認定NPO 法人生態工房 理事長）

質疑応答

## 講演「身近に迫る侵略的外来水生植物～今や、手賀沼・印旛沼から千葉県全域へ！」

【水生植物とは何か】生活スタイルで、沈水植物・抽水植物・浮葉植物・浮遊植物に分けられる。沈水植物は根が水底の土中に固着していて全体が水面下に沈んだ状態で生活を営んでいる水生植物です。動物プランクトンや小魚などの隠れ家となり、生態系の多様性や水質浄化に重要な役割を果たすが、高度成長期の水質悪化により全国的に激減しました。手賀沼ではアオコの発生や干拓による水辺の改変（垂直護岸化など）で移行帯（エコトーン）が失われ、1973年に野生絶滅し未だに復活していません。今の手賀沼は外来水生植物だらけで、侵略的外来生物として特定外来生物に指定された全ての水生植物がいます。

【手賀沼での確認・拡散】手賀沼流域では、1998年に亀成川でナガエツルノゲイトウ（以下ナガエ）が初確認されました。1990年印旛沼に注ぐ鹿島川への侵入があり、亀成川上流部の水田は印旛沼からの

農業用水を使っているため、ナガエの切れ端が侵入し繁茂、その切れ端が亀成川に排水され、手賀川から北千葉揚排水機場内に侵入し、北千葉導水路を通過して、北千葉第二機場と大堀川注水施設から流入し、手賀沼に侵入しました。

このように灌漑によってナガエが畦畔や田んぼに入ります。そして、農業用排水路から河川へ、利根川から九十九里へ流れます。九十九里の浜辺でもナガエを確認しています。塩水でも死なないので、内房・外房へとどんどん拡散しています。

**【陸地での拡散】**

ナガエは陸地でも育つため、水辺でない所にも侵入しています。除草剤で在来種が絶滅した所へ侵入、都市公園の土嚢（ナガエが入っている）から定着、市民農園など、街の様々な所で確認されます。北柏ふるさと公園の一部にも繁茂しています。

**【拡散させているのは人間】**

- 河川改修工事で、蛇籠にナガエが流れ着くと住み着く足がかりになる。
- 釣り人が足場を作る時にナガエの断片を流している。
- 用水路を除草剤で完璧に駆除すると、最初に生えるのはナガエ
- 田んぼに侵入したナガエは、コンバインで稲と共に刈り取られて根付く。

**⇒したたかな戦略で拡散する、敵を知って対策する**

**【治水】**花見川から東京湾へ排水する大和田排水機場では、印旛沼から流入するナガエが、スクリーンの目詰まりを起こしポンプが機能せず内水氾濫を起こします。

**【利水】**田んぼにナガエが入ると、田んぼを埋め尽くし、稲に光が届かなくなり収穫もできなくなる。また、畔をナガエが突き破って水漏れを起こし、田の水が干上がる。畑に転換してもナガエの影響で収穫を断念するなどの事例が増えてきました。

**【親水】**水生植物はプランクトンや小魚などの「隠れ家」の機能を持ち、種類により集まるプランクトンが異なる。また、他感作用（アレロパシー）物質を出し、他の生き物に影響を与える。オオバナミズキンバイ（以下オオバナ）・ナガエはプランクトンとの親和性は貧弱で、オオバナとナガエが共存する水域は、水は透明でも、プランクトンを食べる魚もいないため、物質循環が進まず、水質浄化が進みません。

**【大規模駆除とこれから】**大規模駆除により岸辺から大群落は消えたが、少しでも残っていれば再繁茂する。そうならないように駆除をしていく。侵略的水生植物が人間の生活を利用して入り込んでいます。私たちの身近で、知らないうちにこれだけ広がっていることを知っていただけたと思う。県庁の関連のある部局、大学、中央博物館などで、横の連携を始めています。これからは市民・企業とも横のつながりを持って見守り、情報を共有することが必要です。



出典：千葉県立中央博物館制作「侵略的外来水生植物」パネルより

**質疑応答**

Q：これからの駆除はどうしたらよいのでしょうか？

A：担当組織が必要です。事務局機能も必要で課題です。

Q：将来完全に駆除することはできるのでしょうか？

A：かつて繁茂していたホテイアオイやセイタカアワダチソウのように、駆逐されてはいるが弱まっているというような状態になると思います。



## 解説「アカミミガメとアメリカザリガニとのつきあい方」

普段は井の頭恩賜公園や杉並区、練馬区などの都立公園を中心に、外来種対策や最近では「かいぼり」もはやらせている環境保全団体です。今回はアメリカザリガニやアカミミガメに対する法律が変わったので、外来生物法についてお知らせし、今後の駆除活動にもつなげていければと思っています。この啓発ポスターは、都民から相談を受ける警視庁からの相談がきっかけで、東京都と環境省も参加して作りました。都立公園では外来種対策をしないと生物多様性を保てません。

日本自然保護協会は、2003年から10年毎にカメ類生息数の市民調査をしています。アカミミガメは、2023年は790万匹で、割合は減りましたが圧倒的に多いです。

アカミミガメの問題点は水草被害、鳴門レンコンはアカミミガメによる農業被害です。兵庫県の溜池では2015年ハスが出なくなり、カメの駆除により再生しました。カルガモの雛を捕獲、飛行機を止めた、線路の切り替えに挟まって電車の走行阻害の報告もあります。

2023年6月に外来生物法が改正されました。これまで国が防除の主な主体だったのが、国・都道府県・市町村による防除体制とし、強化しています。生態系への被害が拡大しないように「輸入・野外への放流」を規制しています。

今、野外にたくさんいます。防除と規制が必要です。

ネイチャーポジティブ2030年目標では、生物多様性の損失を止めることから一歩前進させ、回復に転じさせるとしています。行政・市民いろんな人が関わる総力戦です！

防除の技術があり、対策を話し合う場も作っています。

ゼロを目指して対策を考えていくのが自分のポリシーです。



2024年2月1日  
公財) 日本自然保護協会 発表



図3 2003年、2013年、2023年の自然しらべで報告されたカメの割合の比較  
2023年もアカミミガメが一番多く確認された

### 質疑応答

Q：ナガエ・オオバナは今後どうすればよいか。防除としてこれでだいじょうぶなのか？

A：模索中です。農家さんは収量が減少しているため、支援が必要と思う。ナガエを刈り取ったものは事業系ゴミとなり有料で更なる負担となっています。(林)

Q：手賀沼のハスが消えた原因を知りたい。

A：滋賀県彦根城・佐賀城では、カメの駆除により再生した。今までの知見ではカメが原因であることが多い。手賀沼はわからない。(片岡)

A：手賀沼のハスは、人為的に入れられた外来種。ハスは作物と観賞用を分けて考えるべきと思う。

ハスは他の生き物を駆逐してしまうので、生態系保全を考えれば駆除すべきと考えます。一方蓮見船での地域おこしを否定しません。住民と行政が話し合っていて決めていく事と思います。(林)

Q：日本自然保護協会の調査の2023年の結果で、「スッポン」が急に増えているが、中国からの移入種によるのではないか？

A：協会の判定がAIになったことも要因になっているかもしれない。正確な区別は遺伝子解析が必要。西日本では中国種や交雑種も増えています。